
電腦シティ

GO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳シティ

【Nコード】

N0434J

【作者名】

GO

【あらすじ】

電脳シティという異世界に巻き込まれた、完璧少年と変な少女がゲームに参加する話

プロローグ

電腦シティ。

というサイトをご存知だろうか。

それは都市伝説として流れているのだけれど、
どうやらそのサイトに入ると、パソコンの中のプログラムを
繋げた新しい世界に行けるとのことである。

高2だった俺は勉強もスポーツもこなせる所謂勝ち組人間で、
調子に乗った俺は世界は自分の思い通りだと思い込んでいた。
だから、俺は今の世界に退屈していた。
だから、軽い気持ちでそのサイトに入った。

その瞬間、俺の身体は異世界にムーヴした。
ふわふわとした感覚の後、突如襲い掛かる衝撃。
そして俺は無数の数字が描かれたビルに覆われる意味不明な世界に
迷い込んだ。

「とどのつまりこういうことであって、

俺はそんな訳で今こんな所にいるんだ。わかる？」

「わかんない」

俺は目の前にいた幼い少女を不覚にも殴りたくなった。
俺がこの電脳シティに来た時、なぜか俺が居た場所の横に、
この12歳くらいの少女が座っていた。

そして俺に問いかけるのだ。
あなたは どうしてここに居るの？と。

だから今こうして説明しているんだけど、
如何せんこの少女は物分りが悪いらしい。何も分かってくれない。

その時、誰かが俺達に向かって声をかけた。

「新しい参加者の方ですか？」

この参加という言葉を聞いたとき俺は思った。
電脳シティにある、参加型の競技。

それってまるで「ゲーム」をするようじゃないかって。

俺は振り向いた。

その瞬間、周りから何百人という人間が現れた。
そして地面から数字の壁が生えて来てドームのような形になった。

「アタラシイゲームノオシラセデス。」

電子音がドーム内に鳴り響いた。

予想は的中してしまった。

ゲーム。どうやら俺は巻き込まれたみたいだ。

意味の分からない世界に。

ゲーム開催

「電腦シティー、第154回ゲームへようこそ。
今回司会を勤めさせていただきますのは、この私ミネでございます」

そう言つて、髪の毛の長い女性がふわふわと宙に浮いた乗り物に乗つてやってくる。

最早現実を超えすぎて何がなんだか分からなくなった俺は、不思議なことにこの電腦シティーに慣れてきていた。そして俺はその上でこのゲームというのが何なのかを理解するため、ミネという女性に質問をする。

5

「すみません。質問なんですけど、
これって勝つたら何があるんですか？」

すると、ミネという女性はにっこりと笑つて言った。

「確か……あなた達は新しく電腦シティー入ってきた一ノ瀬さんと春波さんでしたっけ。
いいでしょう。このゲームに参加する以上あなた達には知る権利があります」

そういつて、ミネという女性は声高に堂々と叫んだ。

「電腦シティの神になるのです！！」

ああ、ぶつとんでいる。ぶつ飛びすぎだ。
こんな異世界に連れ込まれた上いきなり神だといや、ぶつとびすぎて逆になんだかまともに見える。

ていうか、隣にいるこの女は春波っていうのか。
どつりで春みたいにほけほけしてる感じだ。

そんなアホなことを考えていると、ミネは更に付け加えて言った。

「ちなみに神になるとこの世界を統治する権利、
もしくは現実世界に戻る権利を得ます。
しかし、神になるにはこのゲームの最終ステージで
現在の神を倒していただかなければなりません」

「その現在の神っていうのは誰なんだ？」

すると、ミネは少し震えた声で言った。

「相当、お強い方ですよ。
第52回からずっと神を続けてらっしゃいます。
名前は確か……」

すると、ミネの背後にモニターが出現しそこに顔が映った。

「エイジだ。エイジと呼んでくれ」

周りにいる奴らが口々に叫ぶ。

「神だ！あいつが最強と呼ばれた神だぞ……！」

俺はそいつの顔を見て思った。

こいつは確かにかなり強い。

おとなしい感じだが、漂わせてるオーラがまったく違う。

まるであらゆるものを超越するかのような。

それに52回から神をやってるってことは今回が154回目だから

……

102回も神をやってるってことじゃねーか！

額から汗が吹き出た。

俺はこんな化け物を倒さなきゃ外の世界に出られないのか。
くそ……来るんじゃないか。

そう思っていると、春波が俺の手を掴んでいった。

「落ち着いて。私と組めば絶対に勝てる」

「何……？ お前に一体何が……」

俺の言葉を遮ってミネがマイクを手にして言う。

「第一ゲームの内容が決まりました。

皆さんお近くの人とペアを組んでください」

俺は知り合いがいなかったので仕方なく春波と組むことにした。
すると、急に俺と春波の手に手錠が出現した。

くそっ……何だこれ？

必死に外そうとするが外れない。

「このゲームが終わるまでそのペア同士の手錠は外れません。
手錠が外れるのはゲームが終わったときです。」

嘘だろ？

俺は春波を睨み付ける。春波は俺を見てえへつと笑う。

「そして第一ゲーム。その名は空中ロード！」

ミネの言葉を境に、俺達が居た場所が急に高層ビル並の高さになり、遠くにも相当高い場所が出現した。

下は真っ黒い闇に覆われているので、落ちたらどうなるか分からない。

更に、高い地点の2つの間に道はない。

「みなさんにはこの空中を歩いてもらいます」

俺はミネのこの言葉を聞いた瞬間、鳥肌が立った。
こんな女を抱えて空中を歩けたと？無理に決まってる。

空中ロード 01

皆がざわつき出す。当たり前だ。
空中を歩くのは人間には不可能だ。

「このゲームの制限時間は30分です。
急がないと終わってしまいますよ?」

ミネがうふふと笑って俺達を見下す。
しかし、やはり他の人間達は誰も足を踏み出そうとしない。

すると、春波が俺に向かって囁いた。

「行くよ、一ノ瀬」

やっぱりこいつは物分りが悪い。且つガキだ。
ガキには空中が歩けないことも分からないのだろうか。

俺は春波に言う。

「あのな、空中を歩くのは無理なんだよ。
だからこんなゲーム最初からクリアなんて……」

春波が言葉を遮って俺をじろっつと見る。

「無理なのか？」

本当に無理なのか？

無理なゲームをわざわざやらせるのか？」

俺は一瞬動揺する。

一理はある。

確かに無理なゲームをわざわざやらせる意味はない。

だとしたらどこかにこのゲームを攻略するヒントがある筈だ。

このゲーム、空中ロードを攻略する方法が……。

その時、俺の中で何かが引つかかった。

空中ロード？ロードっておかしくないか？

まるでここからあそこまでに道があるかのような……。

俺は春波を見た。

春波は地面の砂を手にとって風の動きを読んでいる。

「なんで風の動きを読んでるんだ？」

春波はぼそつと呟く。

「なんとなく」

聞いた俺が馬鹿だったみたいだ。

しかし、俺はそれを見てこのゲームの意味を理解した。
そう、空中ロードってことはやっぱり道があるんだ。
でなければこの空間に風を吹かせる必要はない。
道を歩かなければ風で落ちることもないからだ。

つまり、どこかに見えない道がある。

しかし、それは目には見えない。

いや、よく考えろ。

目に見えないなら見えるようにすればいいじゃないか。

俺は春波の持っている砂を奪って向こう側へと向かう淵に立った。
そしてしゃがみ込んで、砂を落とした。

その時だった。

砂はそのまま下の黒い空間に落ちずに、途中でとどまった。そう、やはり見えない道は存在していたのだ。

俺が試しに足でその場所を踏んでみると、やはり道はあった。しかし、その瞬間あることに気付いた。

砂は、風に吹かれてすぐ消えてしまう。ということは道が見えるのはほんの数秒だけってことだ。

春波は笑った。

「なかなか難易度が高いみたいね」

「おい、なんだか道があるみたいだぞ！」

俺が道を見つけたのを機に他の奴らも崖の淵に集まってきた。そして、俺と同じようにさまざまな場所で砂をふりかける奴が現れる。

すると、俺が進む道以外にも道はあったようで俺達以外にも道に砂をふりかける奴らが現れる。

そこで気付いたのはこの透明な道が一直線じゃないってことと、この方法でやったら全員が向こう側に行けるってことだ。

しかし……向こう側に行ければ良いというわけではない。なぜならこのゲームには制限時間があるからだ。

いちいち砂なんて降りかけてたら確実に遅れるし、そもそも最後の道まで降りかけるだけの砂を持っていくとしたなら、相当な時間がかかり、なおかつバランスを崩して落ちやすい。

「一体どうすれば……」

その時、別の道で誰かが落ちた。

「うわああ!!!」

運悪く突風にあたっただけらしい。

それを見た別の奴らは落ちないように道にしがみつく。

俺はそれを見て気付いた。

なぜこんな簡単なことに気がつかなかったのか。

道にしがみついて進めば確実に道からは落ちないし、

なおかつどこに進んでいけば良いかなんてはつきりと分かる。

そして、これなら30分にも間に合うかもしれない。

俺はすぐさま春波に言う。

「道にしがみついて歩こう。」

そうすれば落ちない」

すると春波はしゃがみこもつとする俺を制止して言った。

「待つて。」

私達の手到手錠がかけられてるってことは、二人で道にしがみ付くなら必然的に前にいる人間は後ろ向きで進むことになるよね？」

俺は考える。

確かにそれ以外に方法はない。
俺がこくりと頷くと春波は言った。

「これは罫かもしれない」

言っている意味が良く分からない。
いや、気にすることもないか。
そもそもこいつの言ってることを気にする意味はもつとない。

周りの奴らは俺達より先に道にしがみついて進んでいる。
早く、しがみつかないと俺と春波だけが制限時間内に辿り着くことができない。

しかし、しゃがみこもつとする俺を尚も春波は制止する。

「落ち着け。死にたいのか」

その迫力に俺は一瞬動揺した。

そしてその瞬間、道にしがみ付いて進んでいた奴の一人が落ちた。

「しがみついていたのに一体どうして……」

俺は考える。

しがみついていたということは道が続いている限り絶対に落ちない。

となると、落ちたのは不注意か……？

いや、落ちたらどうなるかも分からない状況で普通それは考えにくい。

だとすると、思い浮かぶのはただ一つ。

道が途中で途切れている場合である。

そう、しがみついていた奴はそれに気付かずには落ち、手錠で繋がれている人間もそれにつられて落ちたんだ。

「道は途切れている場合もある。

だとするともしかして……」

俺の考えていた最悪の予想を春波が言っただけのける。

「このたくさんある道の中で向こう側まで
続いている道は少ししかないのかもしれないな」

足下から恐怖という感情が上ってくる。

その時、ミネから残り時間が伝えられる。

「残り時間はあと10分です」

もう20分も経ってたのか！？

ありえない。俺の感覚だったら逆にあと20分だと思ったのに。

その時、春波が俺を見て呟いた。

「一ノ瀬、風は右の方向から吹いているぞ」

風？風が右から吹いているのが何なんだ？

あの時砂を落としていたのはやっぱり風を調べていたのか？

一体風の向きで何が……？

頭がパニックを起こしそうになる。

そんな極限の状態で俺は一つの攻略法を思いついた。

「風の動きを見て道を探れってことかよ……!!」

それは普通の人間には到底不可能。

しかし、俺ならギリでできる可能性がある。

春波は俺の可能性を信じてそう言ったのかもしれない。

だったら、俺はそれに応えるべきだ。

例えそれがどんなに危険だとしても。

拳を握り締めて自分を奮い立たせる。

「大丈夫……俺ならできる……！」

そう呟いた瞬間、春波は俺の背中に飛び乗った。

「出発だ一ノ瀬」

偉そうだが、今はそんなことにかまっている場合じゃない。
俺は春波を背負って風で道を探りながら、一目散に走った。

俺の目に道は心地よい程見えていた。
しかし、その瞬間悲劇が襲った。

俺達の目の前にはもう道がなかったのだ。

「終わった……」

俺がそう言ったら、春波は笑った。

「まだ勝機はあるよ」

そういって、春波は横の別の人間がしがみついている道を指差した。

「飛び乗れ」

不覚にも殺意が湧いた。

空中ロード 04

「お前分かってんのか!？」

道は大体幅が50センチくらいしかないんだぞ？

そんなの飛び越えられるわけ……」

俺がそう切れると、春波はあきらめたように呟いた。

「無理か。そうか、お前には無理か」

その時、俺のプライドが軽く反応した。

お前には無理、一番むかつく言葉だ。

お前ならできると言われ続けた俺にとってそれは
もっともむかつく言葉だった。

俺は仕方なく春波を背負ったまま横を向く。

「飛ぶよ、飛べばいいんだろ」

その時、ミネがまた残り時間を告げた。

「残り時間はあと5分です」

まずい、もう時間がない。

どちらにしろここが飛べなければ俺達の負けか。

仕方ない……こうなったら飛んで……。

その時、俺の脚が止まった。

「どうした？」

春波が聞くが、俺は何も答えられない。

ああ、やばい。ここにきて足が震えるなんて。

今まで何ともなかったのにどうしてこんなところで……。

時間制限のプレッシャー、春波を背負いながら歩いた為の足の疲れ、それらが組み合わさったのか？

いや、そんなこと考えてどうするんだ俺は。

足が止まっていようがここは飛ばなくちゃだめだ！

焦る自分を必死で落ち着かせた。

そして俺は思いっきり勢いをつけて、

跳んだ。

そして、俺は上手く向こう側の道に着地した。
しかし、そこで思わぬアクシデントが起きた。

春波が俺の背中から落ちてしまった。

「うわっ！」

春波と手錠で繋がれている俺は何とか落ちないように春波を引っ張った。

しかし、今度は引っ張った方向に落ちそうになる。
俺達は必死でバランスをとる。

その時だった。

誰かがバランスを崩した俺達を突き飛ばした。

「え!?!」

それはあまりにも理不尽といわざるを得ない状況だった。

そして、俺達は道から……落ちた。
春波は俺を見て言った。

「一緒に死ぬことになるとはね」

俺はこのとき初めて自分の状況を理解した。
俺は、もう、死ぬんだって。

俺達を突き飛ばした奴は俺達に向かってこう言った。

「俺の名前は岩崎、こいつの名前は川倉。
運が悪かったな。俺達に目を付けられて
また今度会えるのを楽しみにしてるぜ」

もう今度なんてねーよ……。

そう思いながら俺は暗闇に落ちる中で気絶した。

エンドレス

俺は死んだ。

そう、俺は死んだのだ。
このゲームで死んだのだ。

「……きろ……！」

死んだはずなのに声が聞こえる。
おかしいな、空耳だろうか。

「起きろ……！」

あれ？確実に声が届いてくる。
いやそれどころか目の前がくつきりと見えてきた……。

目をごじごじとこする。

まるで眠っていたような感覚。

そうだ、俺は落ちる中で気絶してそのまま……。

死んでない。

あれ？死んでないぞ俺。

春波が俺の目の前ににゅっと顔を出して言う。

「ようやく目が覚めたみたいだな」

俺はすかさず春波を問い詰める。

「ど、どうして俺達あの高さから落ちて死んでないんだ!？」

春波は両手を広げて馬鹿にしたように笑った。

「あのね、ここは電腦シティなの。

現実と同じ構造ではできてない。

だからさ、落ちても死なない。

というか、ここにいる限りは死ぬことは絶対にないわ」

死なない……マジかよ。

俺は辺りを見回して自分が本当に天国にいないかを確認める。

周りの景色は俺達が来た時と同じように

数字の壁で作られたビルが無数にたっているだけだ。

「とりあえず、身体を起こして。
」飯でも食べに行こう」

そういつて春波は俺の手を引いて近くのビルへと向かった。
そして、ビルの中に入り適当なテーブルに付いてイスに座る。

「お子様ランチ二つ」

そう春波が言うと、テーブルの上に本当にお子様ランチが出現した。

「一体どうして……」

「別に不思議じゃない。

　　電腦シテイは全ての元素を組み合わせるあらゆる物を構成でき…

…」

「いや、俺が聞いているのは一体どうしてお子様ランチなのかってこ
とだよ」

「……だって好きなんだもん」

春波が頬を赤くしながら下を向く。

12歳にもなってお子様ランチ食ってんじゃねーよ、と突っ込みたかったが恥ずかしそうな春波を不覚にも可愛いと思ってしまったので止めておいた。

仕方なく目の前においてあるお子様ランチを食べながら、俺が一番気になってることを聞いた。

「あのさ、落ちてても死なないってことは、俺達はこの世界にいる限り不死身ってこと？」

すると、春波は顔を上げてさびしそうな顔でこう言った。

「不死身じゃない。
生ける屍というのが正しいわ。」

私達は勝つまでエンドレスにあのゲームを繰り返さなければならぬのよ」

俺は最初その言葉の意味が分からなかった。
だから、春波を元気付けるように言った。

「死なないでいられるなら、ずっとここにいればいいだろ」

しかし、春波はまたさびしそうな顔でこう言った。

「死ねないというのが実は一番辛いんだよ」

ホーム

春波がその言葉を告げた後、俺達は暫く無言になった。

そうして時間が経ったとき、誰かがこのビルの中に入ってきた。

「おっす、新入りさん」

俺に手をひらひらと振って入ってきたのは
20代くらいの若い男で、青い髪が異様に長かった。

「青柳、来てたのか」

どうやらこいつは春波の知り合いらしい。
何だか社会生活不適應者って感じの雰囲気だが、
こいつは誰なんだ？

春波が俺に紹介する。

「こいつは確か第51回目からこの電腦シティに入った男だ。
ここに来た私にこの世界の説明をしてくれたんだ」

青柳が笑う。

「思い出すよお。」

君はここに来た瞬間急に俺を見て説明しろって叫んだんだよね。

俺は正直面倒くさかったけどしがみついて離さないから仕方なく

……」

春波が口を挟む。

「まあそんな訳で仲良くしてやってくれーノ瀬」

なんかここには変な奴しかいないみたいだな。

そこで俺はふとあることに気付く。

51回目ってことはもう70年近くここにいるのか？

でも年はまだ若い……。

俺はその瞬間鳥肌が立った。

本当にこの世界はエンドレスなんだ。

時間も俺がここに来たときからずっと止まっているってわけか。

永遠にここにいたら永遠にゲームを続ける。

そうしていつかはここに居ることすら苦になっていく。

死ねない悲しみ。

それはその苦にあるのかもな。

俺がそんなことを考えていると、
青柳が俺に話題を持ちかけてきた。

「それより君、今日どこに泊まるの?」

「え?」

「まさか、春波さんの家に泊まるのわけじゃないよねえ。
君だって結構いい年なんだし」

俺は春波を見た。

春波は怪訝な顔で俺の方を見ている。

おいこら、なんだその表情は。

すると、青柳が俺にある提案を持ちかけてきた。

「君、家に泊まらない?」

「え、いいんですか？」

「いっていいって。」

ていうか、家って言ってもここに来たときに単に見つけた場所を家にしただけだしね。

ここは時間が進まないからいくら寝ていても大丈夫だよ」

「ありがとうございます！」

今日はお言葉に甘えて泊まらせていただきます」

そう俺がお礼の言葉を言っていると、

春波はにやつと笑って黒い顔で俺を見ていた。

一体何が言いたいのかわからないけど俺は青柳に付いていく事にした。

ホーム（後書き）

ちなみに春波が第一話で「どうしてここにいるの？」ってもとからこの世界の仕組みを青柳から聞いていた癖にどうして聞いたんだっと思う方がいらっしやると思いますが、最初のその発言は単にかっ
かっただけです。

馬鹿にしてるだけなんです。

本当はどうしてここにいるか知ってます。

トレーニング 01

「ここが俺の家だよ」

そう言っつて青柳がつれてきた場所、
それは100階はあるであろう超高層ビルだった。

俺は啞然としながら聞く。

「よく、こんな凄い場所一人で占領できましたね」

「いや、このビルは俺一人じゃなく他の人も住んでるよ」

「あ、そうなんですか？」

「じゃあ青柳さんの部屋は何階にあるんですか？」

俺のその言葉を聞いて青柳はにっと笑った。

その笑顔が春波のものと重なり俺は嫌な予感がした。

「100階だよ」

「はあ!？」

「君が100階まで辿り着いたら泊めてあげよう」

「ええ!？」

嘘だろ!？」

100階までこの階段を上りきれてか？
冗談じゃない、俺はエレベーターを使うぞ。

すると青柳に先に釘を刺された。

「ちなみにエレベーターを使うのは無しだ。
もし使ったとしたら100階、階段を上る以上の辛いことが起
るぞ。」

じゃあ俺は先に100階にエレベーターで行ってるから、
ちゃんと上ってこいよ」

そう言っつて青柳はエレベーターに乗り込み、
俺にひらひらと手を振りながらこう告げた。

「これはいいトレーニングになるぞ。」

あのゲームを攻略するためにもお前は力を付けておいた方がいい」

俺はそんな青柳を見て思った。
それはあんたもだろ、と。

こうして100階もあるビルを俺は階段で上る羽目になった。

最初の内はまだ、体力も有り余っていたので楽だったが、
100階あるということが精神的にダメージを負わせ、
50階あたりで足が既に重くなってきた。

「くそ……どうして俺がこんなことを」

その時、このビルに住んでいる誰かが俺の横を
通り過ぎてエレベーターに乗った。

その様子を見てみると、どうやらエレベーターは普通に機能してい
るみたいだ。

本当は別に乗っても何も起こらないんじゃないか？
そういう考えが俺の頭にふと沸いた。

トレーニング 02

なんやかんやで俺は誘惑に負けて、エレベーターに乗ってしまった。

そもそも青柳という初対面の男を信じられるわけもなかったし、
そもそもエレベーターは動くから付いているわけであって、
そもそも俺の脚はもう限界を迎えていたからだ。

100階のボタンを押して、閉じるのボタンを押す。
エレベーターの入り口が閉まり、通常通りに機能した
エレベーターは徐々に100階へと上がっていく。

ああ、やっぱりあれはハツタリだったんだな。

そう俺が思っているとエレベーターの天井から声が聞こえてきた。

「あーあ、乗っちゃったね」

その声が聞こえた瞬間急にエレベーターが止まった。

一体何が起こった？

今の声は青柳だった気がするが……

まさか気付かれた！？

焦る俺、迂闊だった、青柳がこのエレベーターに乗るなど言った以上このエレベーターを見張っているのは当然のことなのに。それを考えていなかった。

よく見ればエレベーターの隅には監視カメラがあり、どうやらそれがどこかのモニターと繋がっているらしい。

青柳はそれを見ながら俺が来ないか見張って立ってわけだ。

青柳は残念そうに言った。

「階段で上ってこいとあれほど言ったのに……」

そんなに言っていない気もするけど。

「罰として一階までこのエレベーターを落とすよ」

「え！？」

俺がそう言った瞬間プツンという音がして、エレベーターが自由落下した。

どうやら青柳がエレベーターのロープを切ったらしい。
そしてエレベーターは安全のために用意されたのであるうクッショ
ンに乗っかり、

俺は1階からまた100階を目指さなければならなかった。

「嘘だろ……？」

そう言っただけで俺がエレベーターのドアが開くのを待った。
しかし、ドアが開く様子は無い。

何だか嫌な予感がした。

「違うよ、出口はそこじゃない。

天井を見てみてよ。そこから出るんだ」

俺は青柳の言ったとおりジャンプして天井の蓋のような
部分を空けて、そこからエレベーターの上に乗った。

そして上を見た。

遥か高いところに青柳がいる。

その青柳が恐ろしいことを言った。

「罰としてそこからロープでよじ登ってきてね……」

トレーニング 03

ロープで100階までの高さを上る？

「無理だ……無理に決まってる」

俺がそう呟くと青柳はすかさず口を挟んだ。

「だから、俺はエレベーターに乗るなといったんだよ。

それでも乗ったお前が悪いんだ。

最後までしっかり上りきることだな」

正論だ。青柳の言っていることは確かに正論だ。
でもだからこそムカつく。

何もいえなくなつた俺は仕方なく

青柳を睨み付けながら上る準備をした。

「あ、一ついっておくけど、この世界では

怪我をしてもすぐに治るから落ちて死ぬ心配はないよ。

まあ、落ちた瞬間は同じ痛みがあるけどね」

死ななくても同じ痛みを味わうって、
そっちの方が逆につらいような気がするんだが……。

遙か上に青柳が立っている。

俺は絶対上った後青柳を殴るということをもちベーションにしてロープを上り始めた。

脚はもう大分使い物にならない。

でも、ロープを上るには腕を使うのも可能だ。俺にはスポーツで鍛えた自慢の腕力がある。

それならきつと最後まで上ることは可能だ……。

そう思っていた。

しかし、暫く上っていてから異変が起きた。

「痛い……」

そう、ロープを上るためには様々な力が必要だ。特に握力。これが相当無いとロープをうっかり離して地上に真っ逆さまなんてことになりかねない。

しかし、俺の手が大分赤くなってきた。

結構これはやばい状態かもしれない。

仕方なく、俺は片手でロープを掴みながら片手を休めることにした。

するとその瞬間急に掴んでいた手が滑り、俺はその瞬間ロープから落ちそうになった。

「うわっ!!」

慌てて両方の手でロープを掴んだ。

「大丈夫かー？」

青柳が俺を見下しながら言う。

クソ……一瞬たりとも油断ができない。

このロープ上り、一見単純に見えて色んな能力が必要みたいだ。

「っしやああああー!!」

俺は今一度気迫を入れ直して、またロープを上り始めた。

暫く経った。

俺がロープを上り始めてから。
本当に暫く経った。

そして気迫で遂に80階程の高さまで上り詰めた。
けれど、そこで俺の腕が限界を迎えた。

もう、上れない。
もう、無理だ。

そう、腕が悲鳴を上げているのが聞こえるのだ。

勢いでどうこうなる問題じゃない。
ここから先はもう不可能の領域なんだと、
俺自身が良く分かっていた。

青柳が俺を見ながら言う。

「正直君は凄いよ。」

ここまで来るとは思わなかった。
でも、ここまで来て落ちたら結局
下の方で落ちても一緒だったと思わない？」

安い挑発。だが、今の俺はそんな言葉でもひしひしと怒りがこみ上げる。
でもどう足掻こうともそれ以上先に上れなかった。

その時、青柳の後ろから誰かの声がした。

「よくやった、青柳」

そう言って後ろから出てきたのは春波だった。

「お前、何でここに……!？」

焦る俺を無視して、青柳が返事をする。

「だから俺に任せてくれって言ったじゃないか」

そういつて青柳は笑った。

その時、嫌な憶測が俺の頭に浮かび上がってきた。

よくやった、ってことは青柳は何か良いことをしたってことだ。けど、青柳が今したことといえば、俺を窮地に追い込むこと……。

そう、俺の憶測とはこいつらが俺を窮地に追い込み、そして俺を殺すことこそが真の目的なんじゃないかってことだった。

春波がこの電腦シティにいる限り死なないといったのも、青柳がここから落ちててもすぐに怪我が治るといったのも、全部もし嘘だったとしたら……。

ゲームに勝つために邪魔な俺を殺す。

それこそがこのロープに上らせた真の理由になってくる。

そう思った瞬間急に春波と青柳の顔が怖く見えてきた。全身の毛が逆立ち、喉元から嗚咽がこみ上げてくる。

その時、俺はあることに気付いた。

脚が大分回復している……。

腕だけで上っていたお陰で大分脚に力が戻ってきたのだ。

そこで俺は100階まで上るもう一つの方法に気付いた。

それはロープを使わずして上るということだった。

「さあ、どうした。」

そろそろ上ってこないと力尽きて落ちるぞ」

青柳の言葉を耳で受け流しながら俺は体勢を整える。
そして、俺はロープを左右に揺らし始めた。

青柳と春波がそんな俺を見て笑う。

「何してるんだお前？」

「いいから黙ってみてろ」

俺の剣幕に圧倒されたのか、春波たちは黙る。

チャンスは一度、もしこれに失敗したら命は無い。
けれど、もし成功したら俺は確実に100階へと上りきれる。

息を大きく吸い込む。

揺らしたロープの振り幅が最大限に達する。

そして、俺はロープから手を離れた。
俺は振られた勢いで高く飛び上がる。
宙を舞う俺の身体。しかし、それは100階の高さまで届かない。

「そこから飛んで100階までこれると思ったのか？」

甘い。甘すぎる。それくらいの勢いじゃ到底ここまで届かない…
…」

しかし、次の瞬間青柳に初めて焦りが見えた。
それもその筈。俺は振られて宙に舞い、
そしてそのまま壁を蹴ったからだ。

「お前、まさか……!!」

青柳のセリフが聞こえた時、俺は壁を蹴って
そのまま反対側の壁へとまた跳んだ。

そして連続でまたその壁を蹴りまた反対側の壁に戻る。
その時、俺の前に遂に青柳と春波の顔が見えた。

「見たか!!」

最後の壁を蹴る途中勝利を確信した俺は、そう叫んだ。
しかし、瞬間、思わぬアクシデントが起きた。

脚を捻った。

最後の最後で遂にいけると思ったのに。
脚を捻ったせいでこの跳躍では向こう側には届かない。

でも、届かせるにはどうするか。
その方法は一つしかなかった。

そう、残されていたのはもうほとんど使い物にならないこの腕で
100階の淵に捕まるという方法だけだった。

「限界を超えてみる」

俺を見て春波が呟いた。

その時思った。

あ、やっぱりこいつら裏切ってたなかったって。
限界を超えてみるなんて裏切ってたと言わない。
なんだなんだ俺の思い過ごしだったのかって。

でも、今更それに気付いたところでどうにもならない。
俺はもう飛んでしまった。今から戻ることはできない。
ここから落ちたら青柳の言ったとおり100階から落ちる痛みを味
わうことになる。

俺は思いっきり手を伸ばした。
そして、100階の淵に捕まった。

しかし、それはたった一瞬だけだった。
その直後腕がビキビキという音を立てすぐに手が離れてしまった。

ああ、もう駄目なのか。

そう思った刹那、急に足に異変が起こった。

今までにない新しい力。
そんな言葉が頭をよぎった。

熱を帯びたような感覚が全身を駆け巡り、
俺はその瞬間左手でまたロープを掴んだ。

そしてそのままぐるりと一回転して壁に飛ばされる。
足が壁に触れた瞬間、急に視界がめまぐるしく動き、
俺の脚はいつの間にか壁を凄まじい力で蹴っていた。

そして俺は春波と青柳の横を通り過ぎて、
100階の廊下に滑り込んだ。

「スーパージャンプ超跳躍力……。
スーパーフットいや、超脚力と言ったほうがいいかしら。
何にせよこれが一ノ瀬の力みたいね」

春波が呟く。

青柳もうんうんと頷いているが、正直俺には何のことか分からない。

「なあ……一体これは何だったんだ。説明してくれよ」

俺がそう聞くと青柳は手招きをして部屋へと俺を導いた。

「とりあえず、中へ」

「あ、ちよつと待って」

俺はとりあえず青柳を一発殴った。
青柳が部屋の中になだれ込む。

「な、何すんだよ！」

「いや、ちよつとむしゃくしゃしたから。気にしないで」

俺は笑いながら部屋に入る。

春波はその後ろから一緒に部屋に入り、ぼそつとしゃべる。

「ばーか。挑発しすぎだお前は」

青柳は殴られた頬をさすりながら、
はいはいって感じで部屋の中に入る。

すると、部屋の中には一人の女が座っていた。黒い髪が長く大人しそうな雰囲気である。

「あら、お客さん？」

そう言うてにこつと笑うその女性は、随分と綺麗で、俺はもしこの人が青柳の彼女だったりしたら、青柳を殺していたかもしれぬ。いや確実に殺していた。

しかし、青柳の次の言葉で彼女ではないと分かった。

「そうだよ、姉貴」

そう、この綺麗な女性は驚くことに青柳の姉だった。どうやらこの二人はそろってここに来たらしい。

その時、いそいそと茶の間に座っている春波が変なことを言い出した。

「その女、青柳あおやなぎ 由里ゆりとこの青柳が

今のところ最終ステージの近くまで行った唯一の人間だ」

正直、ないと思った。

こんな綺麗な女性があんな生き残りレースに勝てるはずがない。

そう思っていると、青柳さん、いや青柳と区別を付けにくいので由里さんと呼ぶことにしよう、由里さんはにこっと笑って言った。

「私はユリだけど薔薇なのよ」

棘があるってことですね。

俺は、はははと苦笑いをしながら鳥肌を隠した。

ルール 01

青柳がお茶を音を立てて飲む。

そして、ゆっくりとお茶を置いてから口を開いた。

「まず、この世界とゲームの仕組みから説明しよう」

そうやって青柳は出した紙の左端にマジックで1日目と書き、左から順番に2日目、3日目……と書いて7日目の時点でとめた。

そして、まず1日目の所を指差す。

「俺達が定期的に行うゲーム。

それは1回ごとで7日間行われるんだ。

1日目に第1ステージ、第2ステージ。

2日目に第3ステージ、第4ステージ。

と続いていき、6日目に第11ステージとセミファイナルステージ。

そして7日目にファイナルステージ、即ち現神との戦いが待っている」

そういつてつらつらと言ったことを紙に書き込む。

春波も俺に説明する。

「今日見たエイジ、あれが現神だよ」

言われなくても分かってます。

青柳は更に説明を続ける。

「しかし、これらのステージで途中で脱落した者は、ドームの外に吐き出され次のゲームまで参加できなくなる。次のゲームはゲームが終わってから1週間でまた行われる。」

「結構早いんだな」

「早いか？俺は十分長いと思うが。何せここは娯楽が何も無いからな」

青柳はそういつて笑ったが、正直俺は笑えなかった。

「また、12個のゲームは毎回ランダムで変わる。今回お前達がやったゲームはまたあるかもしれないし、ないかもしれない」

俺は青柳に質問をする。

「そのゲームに参加しないことはできるんですか？」

青柳が即答する。

「できる。俺と姉貴は今回参加しなかった。

春波も実は今回参加しないつもりだったんだが、
お前がどんな人間か確かめたくて敢えて参加したらしい」

それで、あいつは俺に「私と組めば絶対勝てる」とか言っただけで俺と組ませたのか。

そう思っていると、青柳は急に窓を開けて外を見始めた。
そして俺に言う。

「あとな、この電腦シティに来た奴らはゲームを楽しむ為に皆1つずつずば抜けた力を与えられるんだ。それは一度限界を超えないと発揮できないようにならない。」

だから、今回お前にエレベーターを無理やり上らせた。
お前の能力を確かめたかったからな」

「で、俺の能力って何なんですか。
さっきはスーパーフットとか何とか言っていましたけど」

すると、青柳が急に俺の手を引っ張って窓の前につれてきた。

そして、俺の背中を押した。

「とりあえずここから飛び降りれば分かる」

その言葉を聞いたが最後、俺は100階の窓から落ちていた。

死んだ。今度こそ本当に死んだ。

ルール 02

「うわああああああ!!」

ビルから俺が落ちるのを見ながら、春波が叫ぶ。

「とりあえず壁を蹴ってみろ!!」

壁を蹴ったって落ちるだけだって!

俺はそう突っ込みつつも仕方なく蹴ってみた。

すると、いつの間にか左足も壁を蹴り、

左右交互に足が壁を蹴り始め、

いつの間にか俺は壁を走っていた。

「な、何これ!!!?」

「それが、多分お前の能力だよ!

様々な場所を^{スーパー}スピードで走る力。

即ち、^{スーパー}超脚力だ!」

壁を走りながら俺は思った。

これって凄い爽快感を感じる。
後ろに突き抜けていく風がかなり心地いい。

地上に降りた俺はそのまま走りぬけ、
そこでUターンをして今度は逆に走りながらビルの壁を上る。
行ける。今の俺ならビルも上れる。

そう思い、俺は思いっきり壁を上ろうとした。
しかし、直後頭から転倒した。

「馬鹿、そこまでの力は無いぞ。
重力の偉大さを覚えとけ」

そう言っつて春波が笑った。

俺は仕方なく階段で100階まで上った。
スーパーフット
超脚力を身に付けた俺は
2分ほどであつという間に100階に着いた。

青柳がドアを開けながら言う。

「どうだ？分かったら、自分の力が」

「はい、嫌になるほど」

そこで、俺は気になることを一つ聞いた。

「そういえば、青柳さんや由里さん、
そして春波の能力って一体何なんですか？」

「知りたい？」

そう言った途端3人はすくっと立ち上がった。

「いや、別に今はまだいいです！」

俺は何だか凄いことになりそうだったので聞かないでおいた。
青柳がまた、話を続ける。

「まあ、これで大体この電腦シティのルールは把握したたる。
じゃあ、後は第二トレーニングを繰り返すだけだな」

「え、第二トレーニング？」

青柳がにやつとえくぼを作って笑う。

「そつだ、お前が今日やったあのエレベーター上り。」

あれは俺が考えた物で、いわば第一トレーニングだ。

今度はあれの強化版を次のゲームまでにずっと続けてもらつてぞ

由里さんが振り向いてにこつと笑う。

「ちなみに次の第二トレーニングは私が考案したの」

その笑顔は、とっても綺麗だった。

でも、なぜか俺には鬼のように見えた。

ああ、何でなんだろうね。

セカンドトレーニング 01

「じゃあ、俺と春波は別の場所でトレーニングしてるから」

そう言って、青柳と春波は部屋の外に出て行った。

その瞬間、由里さんが指をパチンと鳴らした。

すると、狭かった部屋が急に東京ドーム並に広くなり
そして高い足場が俺達の地点と、遠くの地点に現れた。

「このビルはトレーニングビルとも呼ばれててね、

このビルのあらゆる場所はトレーニング場にできるのよ。

今私を作ったのは、空中ロードのステージをできるだけ再現した
ものよ」

空中ロードのステージか……。確かに似ている。
けれど、空中ロードとは明らかに異なる点があった。

それは、二つの地点の距離が異常に離れてるということと、
風が全くといって良いほど吹いていないということだった。

「春波から聞いたんだけど、あなた風を読んで道を探っていたのよ
ね？」

由里さんがにこつと笑顔を作ってたずねる。

俺はこくりと頷く。瞬間、由里さんの顔が強張る。

「でもそれじゃ駄目なのよ。」

あなたはその脚をもっと生かせる様にならなきゃ駄目。

それにはあなたの脚で道を感じ取れるようになるくらい、

経験を積んでいかなきゃ駄目なのよ。」

そう言っつて由里さんはポケットからストップウォッチを取り出した。

「3分。3分でこの空中ロードを渡り切りなさい」

「3分!?!」

「ええ。できるわよね?」

俺が無理ですといおうとした瞬間、由里さんが笑った。

「無理ですとか言ったら殴り飛ばしてしまつかもっ」

怖い。この人は怖い。

語尾に「っ」を付けたのが逆に怖い。

確かにこの人はユリじゃない。薔薇だ。

俺は仕方なく、向こう側の地点を見た。

確かに今の俺の脚なら全速力を出せばいけるだろう。

ただ、全速力を出しても道から落ちたら意味が無い。

俺は仕方なく崖の淵に立った。

風が吹いていないので分かりにくいが、

空中ロードと同じように再現しているのなら、

途中までは俺がたどった道のりと同じように走れば大丈夫だろう。

由里さんがストップウォッチを掲げる。

「準備はいいわね？」

「はい、いいです」

「じゃあスタート!!」

そう言って由里さんはストップウォッチを鳴らした。

俺はその瞬間、勢いよく一步を踏み出した。
しかし、そこでアクシデントが起こった。

「道が無い………?」

俺は由里さんを見た。

彼女はまったく変わらない笑顔でこう告げた。

「空中ロードのステージをできるだけ再現したのよ。
できるだけね。でも道は作ることが出来なかったわ」

「うそだろおおお………」

俺はあの時と同じように崖から真っ逆さまに落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0434j/>

電腦シティ

2010年12月8日15時35分発行